

ずいそう

タイのコロポックル

浅野潤一



北海道にはコロポックルという妖精がいて、アイヌと仲良く暮らしていたという。子供の頃読んだコロポックル民話のひとつで、妙に私の心に染み込んだ話がある。

「ある怠け者で邪まな男がコロポックルを捕らえ、一冬分の米と引き換えにコロポックルを開放した。男はこれで何の心配もなく冬を越すことができると喜んだのだが、コロポックルの復讐により燃料を調達できなくなってしまう。やがて男は自分の家の梁や柱を燃料にせざるを得なくなってしまう、雪の重みで家は倒壊、男は圧死してしまう」という話である。この民話は、常に勤勉に働かなければ、北で暮らす者には餓死・凍死が待っているのだという教訓を、圧倒的な説得力と切実な恐怖をもって、道東で生まれた怠惰な私に教えていたのである。

水力発電所の建設のためにタイに出かけたのはベトナム戦争の終了した翌年の1976年で、私はまだ30代の手前、タイも現在の経済成長など想像することもできないほど貧しい状態にあった。政情も不安定でクーデターもどきが頻発し、バンコク市内を戦車が走り回っていることもあったし、夜間外出禁止令が布告されたこともあり、殺伐とした雰囲気は漂っていた。

しかし、プロジェクト・サイトに設けられたキャンプはなかなかのものであり、生活は快適であった。芝生を敷き詰めた広い敷地に白い瀟洒なコティジが十数軒建てられており、各々のコティジには2つの個室と広い共有のリビング・ダイニングが設けられていた。白い天井をチンチョ（タイのヤモリ）が走り回り、時には絡み合って顔の上にくろがり落ちてきたりして、最初の頃は大いに驚いた。特に驚いたのは、この敷地のいたるところに、バナナ、マンゴー、パパイヤ、マンゴスチン、ランブータンなどの果物のなる木が植えられており、実がたわわに実っていたことである。まともな果物の木のない道東で育った私には、その土地はヘンデルとグレーテルのお菓子の家に等しい場所であった。子供の頃、バナナは高価な果物であり、それを腹いっぱい食べることなどかなわぬ夢であった。しかし、バナナはここでは誰も見向きもしないつまらない果物なのである。エデンの園とはこういう所なのだろうと思ったりしたものである。

最近私の甥が十数年に及ぶ東京での生活に別れを告げ、妻と子供2人を連れて北海道へ北帰した。東京はあまりにも人が多すぎて、到底永住できる場所ではないと言う。しかし、暖かくて豊かなエデンの園を知ってしまった私としては、北帰するという気持ちにはなかなか耐えられるものではない。初夏の一番良い季節にだけ北海道に住むのなら結構だが、冬の北海道の生活にはもう耐えられないのではないかと思う。

バンコクには住み着いてしまったヨーロッパ人がずいぶんいるのであるが（最近では日本人も多い）、多分彼らもエデンの園を見てしまった人間なのではないかとにらんでいる。あるヨーロッパ人が「神は何ゆえに勤勉な我々に寒く貧しい土地を与え、このように怠惰な人々に暖かく豊かな土地をお与えになったのか!」とずいぶん勝手な嘆きをもらしたというが、それほど北の人間にとって南の土地は魅力的なのだと思う。

それにしても、極寒のシベリア地域に住んでいた我々の遠い祖先のモンゴロイドの一部が、たかだか1万5千年前に、凍りついたベーリング地橋を通して極寒のアラスカに入り、広大なアメリカの大平原を縦断し、灼熱のパナマ地峡を渡り、アンデス山脈を縦走し、ついには極寒のマゼラン海峡にまで達したという事実は驚異でしかない。私なら、間違いなくコスタリカかエクアドルあたりに留まったと思う。何を好き好んで極寒の地に舞い戻るといふのだ?

ペルーの4,000メートルを超すアンデスの高地に住み着き、リャマなどを飼いながら貧しく、細々と暮らすインディオを見ると、あれほど多くの豊かな土地を素通りして、なぜこんなにも貧しく寂しい土地に住みついてしまったのかとついつい考えてしまう。

1976年にタイに出かけた時、好奇心の強い一組のコロポックルの夫婦がタイと一緒についてきた。彼らはすっかりタイが気に入ってしまい、そのままタイに残ったのだが、その後の消息は聞いていない。タイに住み着いたのか、もっと素朴なラオスに移動したのか、はたまた北海道へ北帰したのか…。妖精は北帰するものなのだろうか。